
異世界に来たのは“ 勇者 ”ではなく“ 殺人鬼 ”

かちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に來たのは“勇者”ではなく“殺人鬼”

【Nコード】

N8258Y

【作者名】

かちん

【あらすじ】

裏でも表でも名の通る最強の殺人鬼集団・洞岳家。

その中でも最強と謳われている洞岳家長男・洞岳謙戯。

彼の殺人能力は「影質操作」。

今日、「絶対不可侵領域」の女・地獄院天音を殺すために、

謙戯は大刀洗山・闘技場に向かう。

奇襲を仕掛けようとしていた矢先に、彼は激しい頭痛に襲われ、意識を失う。

目が覚めるとそこは、ハイテクノロジー満載の世界。

異世界だった。

その世界、謙戯が元居た世界のように、超能力や魔術が発達した世界ではなく、

科学技術の進歩により、「武装機械」と呼ばれるバトルスーツが開発された世界だった。

軍事力で世界の支配権を実質握っている企業・オーバーデッド社、そして、

オーバーデッド社壊滅を企み、世界平和を訴えるテロリスト・ジャステイス。

ひよんな事から、ジャステイスのテロに巻き込まれた謙戯は、彼らと共にテロ活動を行うことを強要される。

そこから始まったのは 異世界と世界を巻き込む巨大な陰謀だった……。

異世界トリップものですが、勇者ではありません。

完全に悪役に近い主人公です。

後にタイトル変えたいと思っています。

序章（前書き）

拙い文章ですが、よろしく願います。

序章

裏でも表でも名の通る殺人鬼集団がいる。

彼らの名は 洞岳家^{ほらおかけ}。誰もが知る、殺人一家だ。

表では、国際指名手配されるほどの知名度で、度々ニュースに上がることがあるが、毎度のことトップニュースを得ている。

しかし彼らが警察機関等にどうこうできるほど、優しいものではないぐらい、誰もが認知していることだった。

彼らはトリッキーな殺人を繰り返す。中には人間業とは思えない殺人手法もある。当然、マスコミは政府に圧力を掛けられ、そんな奇怪な殺人行動については一切報道してはいない。

裏でも表でも名の通る、と言ったが、そのとおり、裏でも名高い殺人鬼集団だ。

裏というのは世界の裏表の裏に位置する 一般人の知らない世界だ。

それは、人智を超えた存在だったり、架空とされていた存在だったり。超能力や魔術といったものが関与しているといっても過言ではない世界だ。

洞岳家はその裏の世界に浸透しているが、暴れすぎて（殺しすぎて）一般市民にも知られるようになってしまったわけだ。

裏の世界で有名なのは実に簡単な事で 多くの殺人鬼集団がある裏世界で、最強と謳^{うた}われた集団だからだ。

どの殺人鬼も、洞岳家と聞けば恐怖し、憤怒する。

それは、自分達よりも「強い」という概念が、社会に染まってしまっているからである。

裏世界では、洞岳家を狙う者達が多い。しかしそれが無謀であると考えているものも多い。

そんな、最強と評価される洞岳家の中でも、最強と呼ばれている存在がいる。もっとも、この場合は世間ではなく、家族の中で、

と限定された話だが。

彼の名は 洞岳謙戯。ほらおか けんぎ

洞岳家長男にして、最強の殺人鬼である。

姉が三人、妹が四人、弟が二人、両親、といった大家族の中でも、それらすべてが最強の殺人鬼集団としての血を引いているのに、その中で最強と呼ばれているのだから、実質世界最強の人間であることは間違いない。

一八歳。一般的に高校三年生で受験シーズンという大変な時期の年頃の彼だが、殺人鬼であるから学校になど通っておらず、専業の殺し屋として金を手にしては食って寝て生きる、といった生活をしている。

今日、彼は一つの依頼を遂行中だった。

それは、殺人鬼集団序列七位と称される 地獄院家の一人・地獄院天音ごくいん あまねの抹殺、である。

今回、標的はボディガード四人を連れて、大刀洗山たちあらいざんを訪れる、という情報を手していたため、謙戯は単身でそこに乗り込み、地獄院天音を搜索中だった。

大刀洗山といえば、魑魅魍魎ちみせうりょうが渦巻くパワースポットとしては世間的に有名であるが、そんなことは嘘っぱちである。真実はというと、殺人鬼がやけに徘徊するという、魑魅も魍魎も関係ないものだ。徘徊する理由としては、修行場として使われていることが多い。自分特有の殺人手法を向上させるためというのが通常だ。

森林に溢れる大刀洗山だが、中心部だけは場違いな闘技場が建てられている。昔、殺人闘技場として使われていたという伝説が残っているが、その物語は表で公表されにくい醜い話である。政府のお偉いさんや、それ以上に権力を持つもの達の、鑑賞という名目の殺人ゲームだったのだ。

死刑囚と死刑囚同士のデスマッチが基本的だったのが、段々と一般人を巻き込んでいくものになっていき、そこに喝を入れたのが消下家という殺人鬼集団序列二位の者達だった。

そういうわけか、殺人鬼にとっては因縁深い、恨みの矛先でもある大刀洗山に潜入というのは、一殺人鬼の謙戯にとっては、少ばかり嫌気が差す任務だった。

目的は目標の抹殺。

それは簡単な事である。

地獄院天音という女の能力は『絶対不可侵領域』^{ぜったいふかしんりょういき}。所謂バリアのような物を作ること、自分自身へのあらゆる干渉を否定する力だ。人智を超えた能力。それこそが、殺人鬼としての特徴でもあるのだ。そんな大層な能力を持つ彼女が相手でも、洞岳謙戯にとっては苦戦すらないだろう。

故に彼は地獄院天音と一度対峙した過去があり、余裕で勝利を収めている。殺人鬼同士の誇りによる小さな喧嘩だったが、それでも実力が謙戯にあることに変わりはない。

天音が居るであろう中心部の闘技場に足を運ぶ謙戯は、段々と視界に入ってくる黒スーツの男たちの視線を避けながら、隠密に彼女へと近づいていった。

謙戯の行動は完璧だった。

立派な殺人鬼として、否、ここでは暗殺者と表現すべきか、彼は地獄院天音との距離を百メートルまで縮めた。

闘技場内部である。

観客席階層と思われる二階に身を潜める謙戯は、一階で白いコートの人々と会話を繰り返す天音の姿をしっかりと見据えていた。白いワンピース姿に、白の長髪。美貌の姿に目がいつてしまうという現象もあり得るが、謙戯の場合は殺しの対象としか見えていない。「……なんだあの連中は」

此処に来て、初めて口にした謙戯は、地獄院天音と交渉らしきことをしている白コートの人々を見て、疑念を感じていた。

やがて、天音と白コートの人間達の会話が終わったのだらう、天音達は別々の方向へ歩き始めた。交渉か何かの終了だろう。謙戯は白コートの連中を怪しいとは少しばかり思いながらも、今回の目標

である地獄院天音を視界に捉え、しつかりと彼女のスキを待っていた。

彼女が《絶対不可侵領域》である以上、スキのない攻撃は全て「見えない壁」によって防御される。それは過去の対峙において経験したことだ。謙戯は彼女の《絶対不可侵領域》を打ち破る方法はただひとつとしか考えていない。

それは 能力発動前に殺す事。実に単純な事だった。

いわば奇襲だ。

そして、そのタイミングはやって来た。

地獄院天音が手に提げていたバッグから携帯電話を取り、耳に当てたその瞬間

「ッ」

謙戯は二階から飛び降り、そのまま一気に駆け出すと共に、周囲の床に映る「影」を手に纏い、その漆黒^{かげ}を槍のような形状に変え、地獄院天音の方向へそれを瞬時に伸ばした。

だがしかし、その攻撃行為と同時に、謙戯自身に大きな負荷が掛かった。

それは、能力使用によるリスクではない。

普通ならあり得ない現象だった。

「……ッなアッ!？」

激痛だった。

外部からではなく、内部からの痛みだ。

頭蓋骨が振動するようなものだった。

伸びていた「影」は地獄院天音の三メートル前で途切れ、虚空に消えた。

謙戯の腕に纏っていた漆黒^{かげ}は徐々に消えた。

天音は突然の事態に驚愕し、携帯電話を思わず手放してしまった。床に落ちた携帯電話の衝撃の響きは、謙戯の悲鳴でかき消された。

「うわあッああああああッッ!!」

洞岳謙戯はその場でもがき苦しみながら、目標を殺そうという信

念のもの、必死に『影質操作』^{えいしつそうさ}を発揮しようとしていた。彼の能力であり、彼の存在価値。世界に存在する「影」を特殊物質として扱う力。

だがそんな最強の名の下に置かれている力も、今では発揮すらされなかった。

叫びを上げる謙戯は、原因不明の頭痛に苦しみ、そして最後には倒れた。

ただ、彼の遠くなっていく意識の中には、地獄院天音の動揺っぷりが理解出来るほど、彼女の声が慌ただしく聞こえていた。

「洞岳謙戯よ！ 私を殺そうとしてたみたい！ ……至急こっちに来て！ ……って、……あれ？」

携帯電話を拾い上げ、必死に電話越しの誰かに事情を説明していた天音だったが、いざ振り返って謙戯のもとを見ると、

そこに、彼の姿は無かった。

001 異世界トリップ/信号機で寝ていた男

パラレルワールド、と称するならば確かに”そこ”はパラレルワールドだ。

もっと近い言い方をするなら、異世界と呼ぶべきであろうその世界。

戦争が勃発していた過去を背負う現世界とは、全く異なる世界、それが異世界だ。

世界とは違う世界。

それはきつと、誰しも考えて、憧れて、行きたがっている世界のはずだ。

だがしかし、異世界などというお伽話の産物に、行く方法など存在しない。

しかし、彼は行ってしまった。

彼 洞岳謙戯は、行ってしまったのだ。

何かと、何かと、何かが合わさり、偶然にも、不幸にも会社一つが世界を握る世界にと。

「あの、聞きました？ 信号機の上で爆睡してる人がいたって話」
「は？」

路上を歩く二人の少女の足元には、矢印の点滅するコンクリートが敷かれている。通常の道路というのは、冷たいコンクリが平面に整理されただけの「道」だが、「異世界」の道路は、特殊加工された『ナビゲートグラス』を掛けることで、行き先までの案内役として、道路に目的地までの矢印が表示される。無論、道路自体に表示

されるのではなく、ガラスのレンズがモニター画面として使われているだけだ。最初の説明はやや合っていない。

最新のナビゲートグラス・王道参ヴァージョンを耳に掛けているのは、セーラー服を来たロングヘアの少女だ。

名前は統夏菜。おとむな

奇妙な話を持ちかけた少女だ。

それに対し、呆れた顔を見せたのが、グラスを掛けていない少女
勇梅終だ。いさめしゅう

こちらもセーラー服を着ているが、夏菜と違ってベースカラーが白色である。夏菜の場合は藍色だ。

彼女たちの目的地は、自分達の住む学園寮だ。

「一体全体何がしたいのか分からない話ですよ。ただでさえオーバーデッド社が厳しい条例を出しているのに、交通機関に喧嘩売るような行為は刑務所行きですよ……」

夏菜は呆れたような顔を示しながら、グラスに表示された矢印通りに足を進める。

「信号機の上で寝たつて……、今までにそんなことあったかしら」

「あるわけないですよ。テロリストでもそんな馬鹿みたいなことしませんし……」

「で、その馬鹿な奴は一体どのどいつなわけ？」

夏菜の隣を歩く終は、夏菜の進行方向に、従うように歩いている。それが『視覚検索』しかくけんさくでもヒットしない人物だそうで、データベースに住民登録してないとするなら、ホームレスですかね」

『視覚検索』というのは、その名の通り、見て調べる事。あらゆる場所に設置されてあるスキャンカメラが、道行く人々を映像で捉え、自動的にそれが誰なのか、どこに住んでいるのかをキャッチするシステムだ。

プライバシーに関して厳しいルールが強いられている現世界と違って、異世界では完全監視下の社会が浸透している。

データベースと呼ばれる全世界住民登録システムに登録されてあ

る人間ならば、スキャンカメラですぐに身元が割り出せるようになっており、防犯カメラや隠しカメラなどで、犯罪者の身元判明などの促進につながっている。現に犯罪率は低下の一方だ。

しかし先程夏菜が述べたように、ホームレス（家なし人間）や、テロリストなどはデータベースに登録されていないケースが多々あり、そこは問題点の一つとされている。

「信号機の上で寝る家無しがどこにいるのよ」

終は道先に建つ信号機を目にする。

夏菜もその信号機を見ながら応える。

「いませんよ」

「……でも居たんでしょ？」

「だからニュースになってるんですよ。オーバーデッド社もよっぽど驚いたんでしょうね、わざわざニュースに取り上げるんだから」

「で、そいつどうなったのよ？」

「オーバーデッド社の見廻組みまわりぐみに保護されたそうです」

見廻組とは、パトロール隊のことである。オーバーデッド社の警察機関管轄の組織だ。

「あつそ」

「……」

「最近はテロリストも活発で、馬鹿な連中が多いけど　その”アホ”も、テロリストと変わらないくらい馬鹿よね」

終の言葉に、夏菜は苦笑いをする。

「アホで馬鹿、なんですね……」

信号機で寝るといふ行為自体は高難度だが、それをしようとする

勇氣はそれ以上のものだ。

第一に、信号機の上で寝るという考えが思いつくだろうか。面積の狭いあの空間で、睡眠という防御姿勢が全く取れない状態になるというのは、危険過ぎるものだ。

しかしそれをやってのけたという”アホ”とは一体どこの誰なのか。

データベースにも登録されず、無職で、所在不明というより所在無しの家なし人間、身元が完全に分からない人間　この世界には居ないはずの存在。

そう。信号機の上で寝るという大胆な睡眠行為をしたのは　洞ほら岳謙おか けんぎ戯だ。

「気づいたら信号機の上に居たって、言ってますけど」
こちらのせかい

現世界の取調室というのは、狭い一室で一對一もしくは数人対一の会話を成す場所だが、異世界の取調室は、やや広めで、多くのパソコンが設置されている。置かれてあるテーブルはタブレット端末付きテーブルで、タッチパネルで資料を使ったり、インターネットを使って検索が出来たりする。

そんなハイテクノロジー満載の取調室の外で、マジックミラーを通して部屋の中の人間を見つめる二人の男性が居た。一人は新人警察の中田。もう一人はベテランの中年親父・君平だ。両者とも黒のスーツを着用している。

中田は先程まで取調室で件の人間と取調を行っていた。A4サイズのタブレット端末を目にしながら、中田は君平に事情聴取の結果を述べていた。

「無意識のうちにやったなんてこと、この場合は考えられないですよ。なんせ信号機の上、ですからね。泥酔して全裸で公園で寝ていましたつつ無意識行動ならわかりますけど、無意識のうちに信号機登ってそこで寝るなんて事、まず考えられないですね」

中田はタブレット端末に目を通しながら、件の馬鹿らしさを溜め息として吐いた。

「そうだな」

君平はポケットから煙草を手に取り、火をつけようとライターをスニッポケットから探していたが、中田に「煙草はやめてください」と止められ、嫌な顔を見せると、仕方ない、と煙草とライターを戻した。

やや不機嫌そうな顔をしながら、君平は言う。

「あんな馬鹿は信号機から落ちて轢き殺されろってんだ」

「……それもまた大問題ですけど。しかしまあ、そうですね、あそこから落ちずに済んだってだけで奇跡ですよ」

「で、あの馬鹿野郎は他になんか言ってたか？」

「それが、妙な事ばかり言ってたましてね」

中田はタブレット端末のタッチパネルに触れながら、それを君平に見せる。

「いちお彼の発言を文章化させましたが……」

「なにに……、ここは何処だ？ 本当に日本なのか？ なんで車が浮いている？ あの仮ライダーみたいなのは何だ？ 俺はどうしてここにいる？ 地獄院天音はどうした？ お前らは誰だ？ ……」

……なんだこりゃ、アイツは何言ってたんだ」

君平はマジックミラー越しにいる件の原因を見つめる。

「まるで記憶喪失者みたいですよ」

「いや、もしかすると偽ってるのかもしれない」

「と言いますと？」

「記憶喪失の振りして、罪から逃れようって感じじゃねーのか。オバーデッドの連中はかんかに怒ってるらしいしな」

君平は溜め息を吐く。

「こんな面倒な事こっちに押し付けんじゃねーよ。あんな野郎さつさと刑務所行かせて、こっちは例の『ジャスティス』の仕事に戻るうぜ」

「……と、言われましても……本人も結構困惑してるっすよ……。
過去のデータベース探ってもヒットしないし」

「ま、あとは任せた」

「あ、ちよつと先輩！」

君平は中田の肩を叩くと、そのまま去っていった。

残った中田は、ミラー越しの騒動の原因を見ながら、頭を掻きむしる。

「あーもうっ！……あいつ誰なんだよ」

マジックミラー越しにいる、一人の少年。

類杖をつきながら、テーブルに設置されているタッチパネルがスクリーンセーバーに変わるのを見て、そこに表示された円を触ると、逆方向に動き出したのを見、驚きを見せると、それを使って暇を潰そうと考えた。

いわゆるタッチパネルゲーム、といったところだ。スクリーンセーバーがゲームアプリとなっているシステムで、こちらからのコントロールが出来ない代わりに、こーやって軽いゲームが出来るわけだ。

「……」

少年 洞岳謙戯は、遊びながら考えていた。

この部屋からの、脱出方法を。

地下街。

地上と地下、二つの街があるのが異世界の特徴である。

もとは空中鉄道開発成功に伴い、地下鉄道なるものを開発中だったものが、段々と企画が発展（暴走ともいえる）していき、地下街という第二の街が出来るようになってしまった。

当然大きなマイナス点も伴う形になったが、地下街ができて二〇年、今まで事故や自然災害が起こった試しは一度もない。それもこれも、大企業にして世界支配を行なっているモンスタービジネス・オーバーデッド社のおかげである。

地下街は正式な区域別はされておらず、地下街全てが地下街と称されている。細かな分け方はされているが、実際その活用はされていない。

ODP東支部（オーバーデッド管轄警察機関東支部）、その真下には地下街最大級のショッピングモールがある。

何故ODP東支部という犯罪者の集まる建物の真下に作られたのかというと、これはオーバーデッド社の信頼と安心の掴むための策に過ぎない。すぐ近くに犯罪者がいるショッピングモールだが、絶対の安心安全を保証するというオーバーデッド社のキャッチコピーに、当初は非難殺到だったが、二〇年もして全く被害が出ていないという歴史から、オーバーデッド社は完璧な安心を届けてくれると、絶対の信頼を、市民からつかんだ、という会社の思惑通りに事が運んだわけだ。

そんな地下街ショッピングモールの片隅で、営業停止となったファミリーストランがある。

外装はマシなものだが、中身はめちゃくちゃで、テーブルも椅子もキッチン用具もなにもかも、交ぜこぜに散らばっている。要因として過去にこの場所で起こった喧嘩の所為だが、それにしても被害が大きすぎる。

今では誰も使っていないこの場所に、居る筈のない人間が居る、というのはおかしくはない。

テロリストにとって、『視覚検索』から外された用済みのファミリーストランは、最高の場なわけだ。

テロリスト　ジャステイス。

世界転覆を狙うテロ組織。彼らは「世界平和」の為にと、テロ活動を起こしている。

過去に、三度のテロを行い、いずれも成功しているが、世界に何ら影響は与えていない。言うなれば、成功ではなく失敗なのかもしれないが、一部の人間達からは英雄視されている面もあり、それらが彼らの活動源でもある。もちろん、それが全てというわけではない。個々の意志によって動いているのが、九割である。

国際的に有名なジャステイスは、オーバーデッド社の使う『武装機械』と呼ばれる軍事兵器の中でも最先端の技術を誇る『バトルスーツ』を駆使するといった、世界に喧嘩を売る行いと共に、そのバトルスーツの性能を生かした無茶苦茶なテロを行う。

武装機械とは、現世界に存在する戦車や戦闘機といったものとは全く違い、人間自身が軍事兵器と成るものだ。例えば、腕につけるランチャー砲だったり、レールガンだったり、足につける加速^{アクセル}マシン機だったり、背中につける飛行エンジンだったり、多種多様の武装機械が存在する。

中でも卓越した技術を持つのが、全身武装 バトルスーツだ。オーバーデッド社独占のバトルスーツ開発が、実質世界の支配権を握ったといっても過言ではない。それほどバトルスーツの強力さは危ぶまれているのだ。

そんな最高峰の軍事力を持つジャステイスは、今日、四度目のテロ行為を予定していた。

その為、ODP東支部の真下に位置するショッピングモールの中でも監視下に置かれていない廃墟 営業停止となったファミリーストランに拠点を置いているわけだ。

その中の、キッチンと呼ばれていた場所で、ジャステイスの一部は最後の確認を行なっていた。

「いよいよ、決行の時だ」

碧眼に黒髪。クォーターの雰囲気を見せる青年・レイが言った。防弾加工の黒いコートを着用し、右手にタブレット端末を手にしている。また、右耳にイヤホンマイクも装備している。

彼の発言を聞いて、周りに居た一五人の人間が一斉に頷いた。

「奇襲班、準備は整ったか？」

レイの言葉はその場にいる一五人に向けた言葉ではなく、マイク越しにいる一人の人間への言葉だった。

そのとおり、イヤホンからは女性の声が聞こえた。

『準備バツチリ、OKよッ！』

「了解した」

レイは周囲の人間たちに言う。

「全ての準備は整った。皆、今回のミッションが今までとは格段に違い、そして異質なものであることを忘れるな。…… 그레이ス！ 今回の目的はなんだ？」

レイは、黒縁メガネを掛けた長身にして細身の男に問いかけた。

그레이スと呼ばれたその男は、

「ODP東支部の安心安全を損なう結果を出すためのテロ行為、という名目下に置かれるバトルスーツの補給及びジャステイスの一員であり尋問を受けている我らの同胞　マリア奪還です」

と、今回のテロの目的を正確に答えた。

レイは感心したかのように頷き、そして周囲に目を向ける。

「皆！　東支部は今までとは違い、完全にオーバーデッド社に染まっている。バトルスーツの大量出動が予想されるが、それに怯えず、堂々と行動することだ。今まさに恐怖しているものは帰ってもいい。役立たずを背負うのは御免だ」

レイの言葉の後に、その場を立ち去ったものは一人も居なかった。ジャステイスのメンバー全員が、強い意志を持っていることが分かる。

レイは少し笑顔を見せると、額に流れた汗を手で拭き取り、静かに宣言した。

「目的を達成させよう」

周囲の一五人は首を縦に振り、イヤホン越しにいる奇襲班の一員も、威勢の良い返事をした。

ジャステイス　テロ組織。

バトルスーツという脅威を持った彼らは、動き始める。

002 怪奇ブラック／そして正義がテロリズム

「もし仮に、君がね、この世界の知識なんにも知らないとしてもだよ。悪いことしたらダメってことぐらい、解ってるよね？」

と、まるで小学生を相手にしたかのような言動をとる中田は、自分でも少々呆れ気味だった。

取調室で、中田から聴取を受けている洞岳謙戯は、腕組をしながら真剣な表情で対応していた。

「ええまあ、解りますけど、ていうか本業がもう悪いことなんですけど」

「え？ なに？」

謙戯の職業は殺し屋である。悪い事という認識ぐらい赤ん坊の頃からしているのだらう。

中田は謙戯の戯言をきちんと聞き取れなかったらしい。

「で、解ってる？ 君がしでかしたこと。交通法違反だからね。信号機っていうのは、交通機関のマナーそのものなんだから。それを侵害・侮辱したっていうのは、罪、大きいよ」

「それこそ心外だなあ。俺は信号機を侵害・侮辱したつもりなんて無いですよ。故に、何故俺があんなところで寝なくちゃいけないんですか。馬鹿でもあんなところで寝ませんよ」

「だから、君が馬鹿だから言ってるの」

「……刑事さん、無意識のうちにあそこで寝る、なんて事出来ますか？」

「できないよね。だから訊いてんの。なんでわざわざ喧嘩売るような真似したのって！」

中田は段々と限界に近づいているようだった。

相手がとぼけているのも無理ない。なにせ謙戯自身、身に覚えがないからだ。無意識のうちにやった、という枠におさまるレベルではない。

「そもそも、俺はある人を探していて、見つけたからその人のもとへ向かおうとしたら、そこからの記憶が消えてるんです。で、気づけば信号機の上でだし、見たことないものばかりだし……。まるでSF映画みたいですよ此処」

謙戯が若干の嘘が混じった説明をしたように、地獄院天音を殺そうとした瞬間に意識を失い、気づけば信号機の上に居たという、どいう紆余曲折があつたのか定かではない現状に勝手に放り込まれてしまっていたわけだ。

「……君、学生？ その黒いコート、制服じゃないみたいだし……でも成年じゃないよね？」

中田は唐突に尋ねてきた。

「一八歳です。高校は休みなんです今日は」

洞岳謙戯は高校に通ってはいない殺人業をやっている以上、公の場に顔を見せることは絶対ない。

「こうこう？ なにそれ？」

だが、中田の返答は疑問形だった。

高校の存在をまるで知らないような物言いだった。

「……高校、って、高校のことですけど」

「……そういう学園施設もあるんだね。俺あんま分かんねーや。……まあ、良いとして。てか、どうしよかつなあ。……いやあ、本当にこれ困ったなあ」

中田は頭を掻き毟りながら、テーブルに置かれたタブレット端末を見つめる。

そこに表示されていたのは、洞岳謙戯の起こした騒動に関する、目撃情報と、その時の映像だった。

「あの、刑事さん」

「……？」

中田は目だけを謙戯に向けた。

「洞岳家って知ってます？」

「洞岳って、君の苗字でしょ？」

「……………」

謙戯は首を傾げた。そして妙に気味の悪い笑みを見せた。

「とぼけてるんですか？」

「なにがだよ。ていうかそれはこっちの台詞だし」

タブレット端末を見ながら中田は愚痴をこぼす。

しかし謙戯は、ますます気味の悪い雰囲気醸しだしてくる。

（こいつはとぼけて喧嘩でも売ってるのか……。それとも本当に俺の事を知らねーのか。……冷静に考えてみれば、こいつはおかしいし日本もおかしい。空飛ぶ車なんていつ開発されたんだって話になるわな。……もしかして俺は未来にでもタイムスリップしたのか？
ますますあり得ないな）

謙戯が洞岳家を知ってるかどうか問いかけた理由はこうだ。

事情聴取の際に名前を問われた際、洞岳と名乗っても何の疑いもましてや驚きもされなかった警察達にまず疑問を持った。そして改めて「洞岳家って知ってます？」と確認してみれば、普通の返答が来るだけの始末だったわけだ。つまり、裏の世界でも表の世界でも有名な洞岳家を、警察たちが耳にすれば驚愕し恐怖し逮捕させようとやけになることは間違いないのにもかかわらず、此处ではスルーされるばかりなのだ。

洞岳家を知らないとなると、この世界に何らかの変化が起こったのか、もしくは日本に似たどこかなのか、という疑念が生じるが、謙戯は、街景や機械のシステムが記憶している世界と全く違うことから察するに、タイムスリップしたのではないかという結論に至ったのだ。

しかし実際は、異世界に転移しただけである。それだけ、と表現するのはおかしいが、世界から別世界に移っただけで、時間跳躍をしたわけではない。

謙戯が考えている間に、中田は何度も声を掛けていたが、謙戯自身は自分の身に起こっている出来事に思考を働かせ、外部からの干渉は全く受け付けようとしなかった。

だが、それから一分と経たずに、事態は急変する。

「本当に刑事さんが洞岳家の存在を認知してな

ッ!？」

轟音が鳴り響いた。

謙戯の語りを遮ったのは、とてつもない轟音と、それから、地震のような強大な揺れだった。

「なに!？ 何何何何!？」

突然の出来事だった。地震のような、そうではないような。まるで何かがこの建物自体に突進しているような衝撃だった。激しい揺れが延々と続いていた。

冷静な謙戯に比べ、中田はかなり焦っていた。思わずタブレット端末を手放し、それすら気に止めず、揺れる建物に心配していた。というより、死ぬではないのかという恐怖が芽生え始め、それに怯えていたのだ。

揺れが続く。

揺れ、揺れ、揺れる。

謙戯は腕組し椅子に座りながら、事の唐突さに疑問を感じていた。

「地震じゃあない。これは人為的な揺れだ」

「え!？ 地震じゃないの!？」

思わず中田は口にした。冷静さを保つ謙戯が大人に見えたのか、地震ではないと聞いて少しばかり安堵の顔を見せるも、すぐさま揺れが起こると顔を引きつらせた。

「下だ」

謙戯は床を見つめた。

「ここ、何階ですか？」

「八階だよ！ それがどうしたの!？」

「危ない。倒壊するかもしれない」

「ええっ!？」

中田の焦りは異常だった。おそらく謙戯の非常時に対する対応が冷静すぎるために、中田の困惑ぶりが大きく見えるのだろう。

すると、謙戯はさっと立ち上がり、中田を見据えてこう言う。

「俺は逃げます。死なないように頑張ってください」

謙戯は鍵のかかった出入り口の方へ足を進めた。

中田は謙戯を止めようと動くが、丁度揺れが起こり、動きを止めてしまった。

「ダメダメダメ！ 勝手に動かないで！」

それに、と中田は内心で呟く。

（ドアには鍵が掛かっているし、ロックの解除はブレインコンピュータルームでしか出来ないから、逃げようたって無理なことなんだよ。俺達ここで死ぬ運命なのかもな……）

揺れは激しさを増していた。同時に、サイレンが鳴り響く。

放送アナウンスが流れ始めたが、内容は原因不明の揺れによるもの、といったなんとも曖昧なものだった。

中田は溜め息を吐いて、テーブルの脚にしがみつき、

そして、謙戯の方へ振り向いた。

「……………え？」

そこにあつたのは 黒い何か。

まるで”影”のようなそれは、洞岳謙戯の腕に絡むようになくねと動き、拳句の果てには彼の腕が上から下へと無造作に振り下ろされてみれば、その”黒い何か”がドアへと伸び、

ドアを 破壊した。

まるで、一つの刀によって斬り壊されるように。

謙戯の腕に纏う黒いそれは 影。

彼の力・影質操作によって、周囲の影を特殊な物質として扱う能力だ。

謙戯は驚愕している中田の方へ首を捻り、笑う。

「お先に」

洞岳謙戯はその部屋から去っていった。

残された中田は、啞然としていた。

「……………なに、今の」

ODP東支部の建物のみが揺れていた。

不可思議な現象とはいわない。単なる物理的攻撃によるものだからだ。

上層五〇階と地下二階で構造されているODP東支部のビルに、一機のバトルスーツが攻撃を繰り返していた。

そのバトルスーツは『カテンミナツキ華天水無月』。

メタリックブルーが光り輝く、細身の体型をしたバトルスーツだ。頭部は猫の耳をモチーフにしたもののような二つの三角形が両耳付近に備わっている。黄色い目をした華天水無月はスピード重視だ。

だが、機体の繰り出す打撃によって、耐震強度の高い特殊仕様のビルが、簡単に揺れてしまう理由は、華天水無月の特殊仕様にある。アクセルウェーブ『一点集中加速連動波』だ。

機体から発する振動波を一点に集中し、瞬間的な速さで連続的に振動波を繰り出す事で、微弱の力が一気に強大になる。

打撃が弱い華天水無月ならではの、速さを生かしたアタックの補助。

一秒で数十回ものパンチを繰り出す華天水無月のスピードは、恐らくバトルスーツ内では最速だろう。

しかし、このバトルスーツを操る人間の体力に限界があるため、使用時間は一〇分と短い。

しかしこの一〇分が、テロリスト・ジャスティスにとっては非常に有り難いものであることは確かなのだ。

『その調子だ。あと少して起爆準備が整う。それまでの辛抱だ』

バトルスーツ内の音声通信システムから、男の声が通ってきた。バトルスーツを着用している人間は、

「大丈夫！ 全然行ける！！」

と体力に余裕を見せた。

華天水無月を着用しているのは、咲夜^{さくや}という一八歳の少女だ。彼女もまたジャスティスの一員で、彼女なりの思想を持っており、その願いを叶える為に、ジャスティスというテロ組織に入る事でより一層近くなるのだ。その為、一八歳という年齢の少女でさえ、こうして軍事兵器を見に纏い、テロを行う。

機体を操るのが少女とは思うまい。

しかし、バトルスーツが未成年の少女でも操れるということが証明されている。

もちろん、咲夜はきちんとした体力補強をしている。

アクセルウェーブ

『一点集中加速連動波』を使いこなせる要因はそこにあるのだろう。ビル^{ビル}の壁にヒビは入らないが、確かに揺れている。

地上からの攻撃は、確かに効いていた。マスコミがバトルスーツに注目し始めたのは、攻撃開始から一分も経たなかった。

やがて警察機関が出動する。

その時

激しい轟音がビルを中心として、この都市全体に響き渡る。

爆発が起きたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8258y/>

異世界に來たのは“勇者”ではなく“殺人鬼”

2011年11月29日21時47分発行